ATH 対人援助学会

Japanese Association of Science for Human Services

第 14 回大会参加記

大会テーマ:「新潟水俣病と私たち」

主催:対人援助学会・退院支援研究会

2022年11月19日(土)~20日(日)

WEB 上での開催

盛会で幕を下ろした第 14 回大会。参加者 の声を集めました。トップバッターは 1 日 目の司会も務めてくださった梁陽日さん!

梁陽日ヤンヤンイル

対人援助学会第 14 回大会に 関わっての思い入れ

今回の対人援助学会新潟大会は、コロナ 感染対策のために残念ながら現地で開催さ れずにオンラインのみになりましたが、そ れでも地元実行委員会から出された新潟水 俣病をメインにした研究テーマの重厚さは 変わらず、参加した私たち一人ひとりに対 人援助に携わることの意味やあり方を問い 質してくれる意義深い学び場となりました。 人によっては「何で今さら新潟水俣病?」「対人援助学とどういう関連があるのか」と戸惑われた方もいたかもしれません。しかし、今回の本間大会長をはじめ退院支援研究会の実践の背景にもある、長年脈々と新潟水俣病の支援で受け継がれてきた援助職の方々の一貫した姿勢、それは清濁併せ吞みながらも徹底して人を大切にする立場に立つ姿に対人援助の原点を見出し、私自身は大きく心を揺さぶられる思いをしました。

あらためて今回の問題提起をはじめ貴重 な証言の数々から、日本の近現代の歴史は 国家や社会の繁栄や発展とセットで語られ ることが多いですが、その神話の陰でその 時々の権力の横暴や利潤追求によって解体、 翻弄されていく人々の生の闘いの歴史でも あり、現在の生存権保障や人権確立のため に今も続く長いプロセスであることを痛感 します。新潟水俣病も高度経済成長がもた らす地元経済の影響力の強さから、行政、地 域、医療関係者が沈黙する中で、齋藤恒先生 が周辺の圧力を跳ね除けて真相究明に道を 切り開き、志同じくする萩野直路さんなど の仲間たちとの立ち上がりによって長い年 月かけて救済の道に導かれたことは本当に 尊敬に値する尊い行いです。

この一連の学びの流れから私は対人援助とは、未熟な人間が不完全な世界と向き合い、不充分ながらも人と関わり合う中で世の中を変えていく、自らを解放する尽きることのない人間解放の普遍的なプロセスではないか、という思いが良い意味で確信として捉えることができた思いです。

社会福祉分野において、日本も採択して いる世界共通の原理である国際ソーシャル ワーカー連盟が定めた倫理綱領の「ソーシャルワーク専門職のグローバル定義」は下 記のよう援助職とは何かを定義している。

「ソーシャルワークは、社会変革と社会開発、社会的結束、および人々のエンパワメントと解放を促進する、実践に基づいた専門職であり学問である。社会正義、人権、集団的責任、および多様性尊重の諸原理は、ソーシャルワークの理論、社会科学、人文学、および地域・民族固有の知を基盤として、ソーシャルワークは、生活課題に取り組みウェルビーイングを高めるよう、人々やさまざまな構造に働きかける。この定義は、各国および世界の各地域で展開してもよい。(IFSW;2014.7)|

これに倣って日本ソーシャルワーカー連 盟の原理においても人権や社会正義、多様 性の尊重の具現化を謳っている。しかし実 際の現場で対人援助職は様々な人々や事象 と出会っていながら、問題解決の礎の中に 社会正義や人権の発揮をミッションとして 抱えながら果たせているだろうか。

その反面、ある地方社会福祉士会の HP には、倫理綱領の紹介と併せて支援とは何かの説明が次のような文言である。「社会福祉法に基づき、公正・中立的に福祉サービスの理念や具体的なサービス内容について専門的な視点から実施し、『利用者の立場に立った』」『良質かつ適切な』」福祉サービスの提供に資することを目的とする」

ここから読み取れるとしたら、実質的に 崇高な理念と現実の日常業務との矛盾や乖離があり、組織の一員として限定された枠 組みの中でいかにうまく立ち回るか。同調 圧力やバーンアウトと隣り合わせの職場に あって生きがいやりがいを育むことの困難 さに直面しつつも、目の前の誰々さんのため、生活のために一生懸命働いている現場 の人たちとつながることも重要なプロセス であろう。だからこそ、昔の使い古されたも のとして現場で見向きもされない「社会正 義」や「人間解放」の意味を問い続け、時代 状況や困難さとの綱渡り状態の中にあっちと も一緒に現場にこだわり、多くの人たちと 築き上げることができる希望の方途として、 今後の対人援助学会につながる私たちの働き(それは研究、実践・臨床・交流、参加等 あらゆることを意味する)は決して小さく ないはずです。

対人援助学会が今年度から3ヵ年計画で大会会場を設定(2022年新潟、2023年広島、2024年京都)することで、各地方における対人援助研究・実践のネットワークづくりと学会のボトムアップをめざす試みが始まりました。まだまだ歴史が浅い小さな学会で不十分な事柄は多くあるかもしれませんが、この3ヵ年の試みは私たちの行動次第で大きく変化しうるダイナミズムの可能性を感じています。

今後とも多くの人たちと一緒に携わって 良かったと思える大会づくり、対人援助学 のプラットホームを創っていくことにチャ レンジしていけたら幸いです。

追記

本来ならば大会運営責任者の一人として全体を概括する文章がふさわしいところですが、今回は純粋に一参加者として見た大会で感じたことを書かせて頂きました。また他のプログラムやポスターセッションについて言及がないことは決して軽視している

わけではなく、現状で思いが溢れすぎてすべてをまとめて書ききれないことから、新 潟水俣病での学びに焦点を当てて書いたことをご理解、ご容赦下さると有難く思います。

次は、ワークショップ 2 つでも活躍され た大谷さん!

大谷多加志

対人援助学会 第14回大会参加録

2022 年 11 月 19 日・20 日の両日で、対人援助学会第 14 回大会が開催されました。学会と関わるようになって 10 年以上が経過していますが、実は大会に参加したのはこれが 2 度目です。一応言い訳をすると、以前は土日に研修の運営をする仕事をしていたため、土日は仕事とバッティングしていることが大半で、ほぼ参加を検討できる状況になかったという事情もあります。

今回は2020年度の大会以来、2度目の参加でしたが、企画ワークショップ2件に関わらせて頂きました。ひとつが企画と司会を担当した「対人援助学マガジン特別企画リアルタイム執筆者短信」、もう一つが対人援助学会の研究会と関わる企画である「サステナブル(持続可能)な研究会のつくり方〜学会設立以前から13年続く、対人援助学会研究会のセブンルール〜」でした。今回は能動的な形で大会に関わることができたので、自分なりの記憶を残しておくことも意図して、大会参加録を書かせて頂くことにしました。公開版の日記、みたいなつもりで

書いていこうと思います。

ひとつ目の企画である「リアルタイム執 筆者短信」は、文字通り、いつも対人援助学 マガジンの巻頭にある執筆者短信をリアル タイムで行おうという企画で、短信に書い て下さっているような近況を執筆者の方に それぞれお話頂き、それに対するフロアか らの質問や感想などを織り交ぜて進行して いく予定でした。とはいえ、本番の時に誰が 参加して下さるのかは、実は当日になるま で全くわかりませんでした。大会参加者数 だけはおおよそわかっていたものの、その うち何名がマガジン執筆者の方なのか?そ もそもこの企画に参加して下さるのか?は まったく不明だったからです。大会前日に、 編集長から「明日の企画はどう進行する の?」とお尋ねがあり、「出たとこ勝負で す!|と返したところ、LINEのグループビ デオ通話機能を使って緊急ミーティングを 開いて頂くという不安に満ちた前夜でした。

「リアルタイム執筆者短信」は、大会開会 直後の最初のプログラムです。どのくらい 参加者がいるか…とドキドキしていると、 参加者は30名強、うち執筆者の方が10名 ちょっとという状況でした。参加者がとて も少ないパターンと、とても多いパターン の両方を想定していましたが、結果「ちょう どよい」集まり具合となり、ワークショップ 冒頭の企画者挨拶の中でも思わず『ちょう どよい人数で、よかったです!』と口走って しまいました。執筆者としては、大会長の本 間先生、学会理事長の中村先生、村本先生ほ か、多くの方がご参加くださいました。少し ずつ初めましてではない執筆者の方が増え てきたことを嬉しく思いつつ、執筆者の皆 さんの近況やこぼれ話を楽しくお聞きしま

した。ちなみに、リアルタイム執筆者短信の 企画趣旨には、次のように記していました。

『本ワークショップではこの「執筆者短信」をリアルタイムで行うことで、通常の誌面では起こり得ない相互交流や意見交換の機会とし、対人援助学マガジンや対人援助学会のさらなる展開や活性化につながることを目標とする。執筆者はもちろんのこと、執筆者以外の読者の参加も大歓迎であり、参加者と執筆者が幅広く交流する機会となることを期待したい。』

結果的には、事前の期待通り、通常ではできない相互交流の場となったと感じており、 企画者としても満足感のある時間を過ごすことができました。

2つ目の企画である「サステナブル(持続可能)な研究会のつくり方 ~学会設立以前から13年続く、対人援助学会研究会のセブンルール~」は、メインの進行を千葉さんが勤めて下さるので、ひとつ目に比べると気楽な構えで参加しました(ひとつ目も"出たとこ勝負!"とか言っているわけですから、十分気楽そうですが)。ただ開始直前の打ち合わせで、『最後のセブンルールは大谷が提示する』という段取りが急遽決まったが提示する』という段取りが急遽決まったました。このワークショップについては記録係も担っていたため、記録を残すという意味で、少し詳しく議論の経過を説明しようと思います。

このワークショップは3部構成になっていて、

① 研究会初期メンバーからのコメント

- ② 2022 年度から研修・交流委員になった メンバーからのコメント
- ③ フロアとのディスカッション の流れで進行しました。

最初は、研究会が設立された当初から関わっていた千葉さんと中島先生から。研究会は現在まで 51 回開催されているのですが、実は当初は学会設立前の「設立準備会」の段階から始まっており、月1回ペースという、かなりの高頻度で開催されていたことを、この企画を通して初めて知りました。

千葉さんからは、研究会初回の案内文の中から、現在の研究会に通じるいくつかの理念が紹介されました。それが、「融合と連携」「多様な職種と領域」「援助実践の振り返り」「オープンな会」「修了生や関連の援助職者を招いた勉強会」という点です。

また、中島先生と千葉さんのお二人からは、情報発信や会場確保の苦労や試行錯誤などが語られました。Yahoo ブログで情報発信を行っていたところ、Yahoo ブログ自体が廃止となり、学会 HP に移転した経過など、長く続けていればこそのご苦労もあることがうかがえました。会場確保の問題から 2018 年以降一時休止状態になっていた研究会が、コロナ禍を経てオンライン形式で復活して今を迎えているという状況もあり、時代の力は追い風にも逆風にもなるのだと感じました。

研究会の特徴として、前半 1 時間が主に ゲストのお話、後半 1 時間はグループでの 討議という流れで、参加者は全員何かしゃ べって帰る、という構造になっていた点が 挙げられます。聞くだけにならず、全員発信 する形になっていたことは、この会が研修 会ではなく研究会として位置付けられていたことを象徴していると思います。

ちなみに、研究会で登壇するゲストには、 謝金は支払われていません。実を言えば交 通費の支給さえないのです。これも、研修会 であればあり得ないことでしょう。ゲスト への支払いがないという点については賛否 があるかもしれませんが、事実としては51 回に渡って講師は登壇しています。もちろ ん、お知り合いの方などこの条件で引き受 けてくれそうな人を人選したというご苦労 もあったことと思いますが、それにしても ゲストの方々はなぜ引き受けてくれたので しょうか。

ワークショップでは過去の登壇者に対して質問として投げかけられました。すると「よい取り組みだと思っているけれど、伝える場所がないから…」という声がありま

した。つまり、リターンがあることが動機になっているのではなく、まず「伝えたいこと」が先にあるということです。これはよく考えると、対人援助学マガジンとも同じです。マガジンも、執筆者は原稿料をもらったりはしておらず、むしろ学会費を支払いながら執筆をしているのですから。知っているからこそ、知っている者の務めとして、人に知らせたり共有したりする。これは対人援助学会自体の特徴と言えるのかもしれません。

他にもさまざまなお話があったのですが、 まとめきれそうにもないので、このくらい にして、最後に当日まとめた「サステナブル な研究会を作るためのセブンルール」を記 して区切りに使用と思います。

対人援助学会研究会のセブンルール (2022



年11月現在、大谷案)

- ① 形式的義務からの自由(申込・資料なし ゆるふわルール)
- ② お金からの自由(会場費・参加費なし)
- ③ 定期開催(次を予定する)
- ④ 企画者側に無理がない(+ 役得)
- ⑤ 交流・雑談の時間を作る(つながる・広がる・偶然性)
- ⑥ コンテンツの消費にしない
- ⑦ ゲストのネットワークにつながる

他にも、大会では今年度の研究会でもテーマとしてきた「新潟水俣病」についての企画ワークショップがあり、また次年度大会に向けての理事会企画「広島の被爆樹木による平和教育」がありました。

この部分は、他の方が参加記録を残してくださると思いますので、詳細はそちらでと思いますが、「正義か、生存か、ではなく」という言葉が強く記憶に残りました。人生は簡単にこのどちらかに割り切れるようなものではありません。「そうは言っても現実は…」「いのちあってのことでしょう」と言うことはたやすいですが、そのような葛藤を抱えながら生きる人々を支えることこそ、「対人援助」の本質であると思うのです。

2日間を通して、たくさんの刺激を受け、 また次回に向けての期待も高まる、大会参 加でした。参加記を読んでくださった皆さ ま、来年は広島です!ぜひ参加をご検討下 さい!

次は、少し違った角度から。いつも学会の 広報・ホームページを担当してくださって いる乾さん、川原さんは今回も大会の前か ら事務局役割を熱心にしてくださいました。 そして、そこでいつもご協力いただいているのは「株式会社ディレクターズ・ユニブ」の板倉一成さんです。このマガジンがこうして読むことができるのも、大会がオンラインで毎年開催できるのもディレクターズ・ユニブさんのサポートあってこそ。…ということで当日2日間に運営サポートをしてくださった板倉さんからも!

板倉一成

株式会社ディレクターズ・ユニブ

対人援助学会 第14回大会参加記

対人援助学会第14回大会@新潟をオンラインサポートの立場から振り返ってみます。

きっかけは、前職の大学コンソーシアム 京都の上司である京都橘大学の乾明紀さん から連絡があり、自分の会社でウェブサイトの制作と保守・管理している対人援助学 会の大会のオンラインサポートをしてほし いという依頼からでした。コロナ禍以降、映 像とウェブ、グラフィックを守備範囲の中 心としている弊社では、大小問わずかなり の数のオンライン配信やオンラインイベン トの運営やサポートを実施してきたが、学 会のサポートのお声はかかってこなかった。

年度末にかけて駆け込みの案件が増えてきて、また年末に向けてタスクが山積みの 僕は、どのみち、この時期は休日出勤が予想 できたので、初めての学会のお仕事という 楽しみも重なり、二つ返事で受託のお返事 をさせていただいた。

6年前から立命館大学や龍谷大学で映画・ ゲーム・アニメなどのコンテンツ産業について、非常勤講師で偉そうに講釈を垂れるようにはなったが、体系的に物事を学んだわけでもなく、撮影現場や居酒屋でいろんな人と話をして積み上げた「街場の映画論」ぐらいしか手持ちにないインチキ講師としては、「学会」なんて聞いたら、どんな専門的な話題が繰り広げられるのか、どんな激しい議論が交わされるのだろう、と多くの想像に駆られた。

まずは内容をさることながら、オンラインサポートについては、ほとんどサポートすることなく、順調に進行したと言って問題ない。僕自身も自分の授業を対面からオンラインに切り替えた苦労を思い返しながら、多くの先生が僕よりも教育現場の中心で、「どうしたらオンラインでも豊かな教育を構築できるか」という問いに腐心していたこと考えれば、オンラインツールやトラブルなどに対する対応力の高さは頷ける。

その中で、今後の申し送りと反省点を、一 点ずつ記載しておきたい。

Zoom において今後の運用で注意したいのが、同じルームに入退室を繰り返す形で運用する場合、入室したタイミングからしかチャットが閲覧できないので、後から入室したユーザーは入室以前のやり取りが把握できないという点である。長時間のオンラインイベントの場合、チャットで繰り返

しお知らせを出すか、別の掲示板などを活 用するかなどの対応策が必要である。

反省点としては、オンラインのポスターセッションのコメント機能のエラーである。 現在も原因の把握を進めているが、特定の環境下で文字数が多くなりすぎるとエラーが出るというものである。この辺も次年度は改善できるようにしたい。

内容については、言及できるほど知識や経験を持ち合わせいないが、1日目・2日目と「新潟水俣病」について大変貴重なお話を聞くことができた。「新潟水俣病」といえば、学生時代に傾倒した数多くのドキュメンタリー映画の中に、佐藤真監督の『阿賀に生きる』がある。これまで見てきたテレビにも、映画にも、それこそ教科書にも載っていない姿がスクリーンに映し出されるのを見て、20歳の僕は大いに衝撃を受けたことを今でも覚えている。齋藤先生のお話を聞き、映画で見た阿賀に生きる人々の表情を思い出した。

また「サステナブル (持続可能) な研究会のつくり方 ~学会設立以前から 13 年続く、対人援助学会研究会のセブンルール~」については、先生たちの実践の振り返りからの言葉も多く、示唆に富む内容であると感じました。僕自身、企画やプロジェクトの案件ごとにチームを作り、目標を達成すれば解散を繰り返すという、すごく消耗的なビジネスの中で仕事をしていることからも、もっと持続的で長期的なプロジェクトを運営していけるチームのあり方を現在、模索しており、大変参考になる内容でした。小さなことですが、○○先生を○○さんと呼ぶ

などは、チーム内では次の日から実践している。

振り返るとサポートを横に置き、一番、学び、楽しんでいたのは僕かもしれない。「学会」というカッコは外れ、この開かれた会の一員として、いつの間にか僕まで文章を書いている。笑顔の千葉さんのお誘いを安請け合いした自分を憎みながらも、コマーシャルとは対極にある部分として、楽しんで書いている自分がいました。

以上

directors univ

映像・WEB・印刷制作/映画配給・映画祭企画運営 お見積りは無料です ☎ 075-222-5525

株式会社ディレクターズ・ユニブ

(directors-univ.co.jp)

次は、次回15回大会につながる「広島の 被爆樹木による平和教育」の発表者もして くださった來須さんです!

來須真紀

対人援助学会に参加して

今回、対人援助学会に初めて参加させて いただきました。

初参加で、発表者という重責を仰せつかりかなり緊張するデビューでしたが、たく

さんの方々のおかげで、なんとか発表も終えることができました。ありがとうございました。

発表を聞いていただいた方はお分かりだ と思いますが、私は小学校の教員です。学校 の社会的な役割は多岐に渡りますが、その 中の一つとして、後世に伝えていかなけれ ばならない事実を伝え、そこから考え、実践 し自分の未来と世界の未来を切り開いてい く力をつけるということがあると私は思っ ています。発表させていただいた戦争、原爆 のことはそれにあたる実践です。この度、新 潟水俣病に関する様々なことと学習させて いただき、教員としてこの事実をどこまで どのように伝え、そこから何を考えさせた らよいかと考えています。もちろん、発達段 階というものがありますので、学習内容や 方法は熟慮しなければなりませんが、今後、 実践例なども探しながら模索していきたい と思っています。

個人的にとても心に残ったのは、出産に 関することです。私は、初産が36歳で、高 齢出産です。高齢出産の場合は出生前診断 をしたほうが良いということが言われ始め た時期で、私も出生前診断をするかどうか 迷っておりました。そんな時、かかりつけの 産婦人科の先生に「授かったんだから、いま さらどうもこうもないでしょ。」と言われま した。私はこの言葉で救われ、母親になろう と気持ちを新たにしたことを今でも覚えて います。この先生のお世話になることがで きてよかったと思えた瞬間でした。2日間 の学びの中で、自分で判断することができ ないまま、家族を作る権利を奪われた人た ちのことに思いをはせていました。10年 前、出生前診断をしようと思った自分と目 を覆い、耳を塞ぎたくなるような事実を重ね合わせました。かかりつけの先生の言葉に感謝しつつ10年前の自分に対する複雑な思いがあふれてきました。安易に新しい情報や〇〇したほうがよいという世論に振り回され、自分自身の意思や気持ちを自分で捨ててしまっていたこと、そしてそんな迷い道から自分の道に戻してくれたのは先生の一言だったことに今更ながら気づかされました。そんな10年前の自分のふりかえりをした2日間でした。

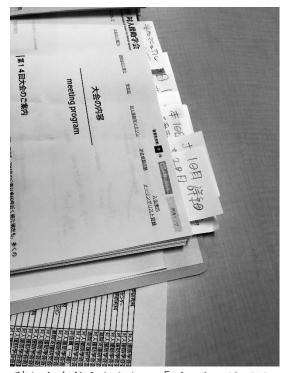
最後に、参加させていただいたご縁に心から感謝しております。ありがとうございました。

千葉晃央

「新潟」から「広島」へ

第14回大会は、とても印象に残る二日間でした。まずは公害問題をテーマに対人援助とは何か?を考える経験でした。大会前の研究会2回、マガジン連載から始まり、本間大会長の精力的な活動のおかげで、様々な側面から接近することができました。しかもそれだけではない。こうした問題に長年向き合ってきた方との出会いである。ゲストに来てくださったり、同時に参加者としても同じ時間を過ごしてくださったり…。まさに対人援助という領域が広がり、同時に共通の願いを実感する経験でした。

オンラインポスター発表にもチャレンジ をしました。コメントから気づきもいただ き、大変ありがたかったです。準備段階で相



談した大谷さんからの「ポスターはパワーポイントがおすすめ!」に従ってよかったです。パワーポイントはオンラインでの発表には適していると感じました。他の方のポスター発表もほとんど読ませていただきました。コメントも複数入れさせてもらいました。読んで、考えて、思考が広がり、自分の知っていることもありました。頭を巡らせていることも楽しかったです。

ワークショップでは研修交流委員会として『サステナブル (持続可能) な研究会のつくり方〜学会設立以前から 13 年続く、対人援助学会研究会のセブンルール〜』を担当しました。中島弘美先生とのラジオトークで振り返る 13 年からスタート。そして、実録!委員の生の声!コーナーでは今年から委員に加わったでは渡辺修宏先生、大谷多加志先生、早樫一男先生から!そして、ゲストに登壇してくださった方!参加者からのお声もいただいた。最終的には、研究会を持

続可能にしたセブンルール7つを大谷さんが決めてくださった。なかなか私たちらしくていい!早速参考にして始めてみたいという即レスもいただいた。

そして、対人援助学マガジン編集部として、リアルタイム執筆者短信!も開催。大谷さんの安定の進行に、横から安心して楽しくチャチャ入れ的参加。著者の方とオンラインとはいえ、コミュニケーションができるという充実タイム。執筆者の正木恵子さんは、千葉が20代の時から同じところで学び、今もこうして一緒に何かするご縁!でも久々の再会に感激!涙が出ました。

この大会では大会の準備から、当日の運 営の一端も経験。大会長本間先生、乾さん、 川原さんと電話で打ち合わせもしながら当 日まで。学会大会が様々な過程を経て開催 され、当日のサポートもどういう体制が必 要なのか、どういう動きが必要なのかを知 りました。広報・ホームページ推進担当委員 会の乾先生、川原さんに感謝。当日はディレ クターズ・ユニブの板倉さんもサポートに。 いつもマガジンの最終アップを担ってくだ さっているので、また違う形でこうしてご 一緒に。千葉もオンライン大会 2 日間のサ ポート係をしました。でも、そもそもこうし て一緒にできることがうれしい。バーベキ ューでも、食事会でもいいのかもしれない けど、学会ということを一緒にできたのは また心地よい喜びがあります。

他者に尽くす、未来を創る、幸せをつくる ことを使命に持つといってもいい対人援助 の領域。こうした学会自体も、関与している 者にとってはある種援助的でもある。気が 付くと、学会があるからできた経験も学び もずいぶん多くなってきました。そして、も う来年の動きが始まっています。援助すべき課題もなくなることはなく、むしろ進展し、広がる。それらに負けずに、支援者も進み、広がるためにまた動いていきますか。

ということで、次回第 15 回大会は 2023 年 11 月初旬の土日、広島 で開催!もうすで に打ち合わせが始まっています!また、大 会で会いましょう!

★予告★

対人援助学会 第 15 回大会 2023 年 11 月初旬 土日開催予定!

ご予定ください!



